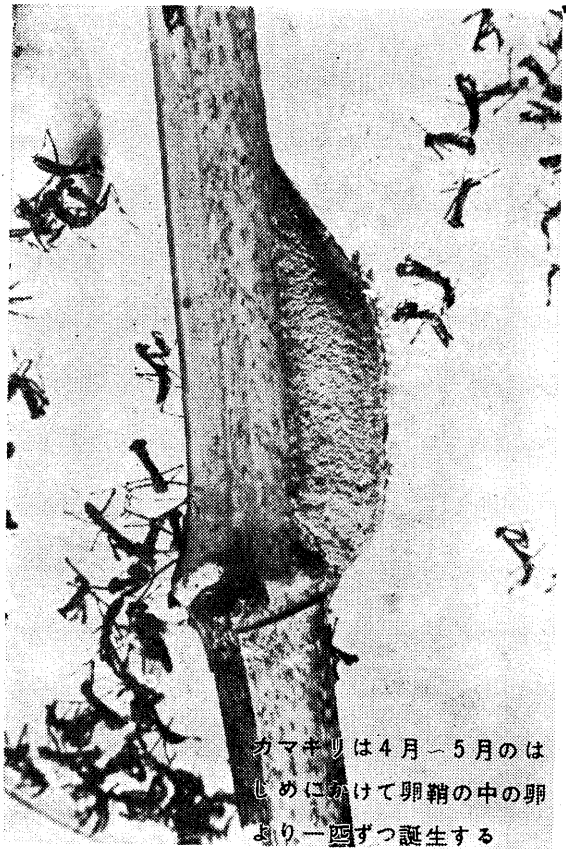
幼児の身につけさせたい生物愛護の気持

阿久沢栄太郎



“ハラビロカマキリの誕生”

一、生きているものを かわいがる心

よく、幼児を持つ母親の間でこんな会話がかわされているのを耳にします。

「うちの子は、とんぼやせみをつかまえると、すぐ、あしをもぎとってみたり、はねをもぎったりしてほんとうに困りますわ。もっと、かわいがってやりなさいっていうんですけどねえ」

やや、歎息の声。

「いいえ、うちのこどもは、ちょっとつかまえて地面にたたきつけてみたり、ふみつぶしてみたりしているんですよ。まったくかわいそうなことをするんでみていられませんの」

と、最早やさじをなげてしまったような述かいぶり。

このような会話はたいてい男の子の場合の通り相場である。

ところが、これと反対に、こんなのもある。

「うちの子はくもがはって来てもきゃっといって私にとびついてくるんですよ。まったく、おく病にはあきれてしまいますわ。」

と、不甲斐なさをなげくようなのもあれば、

「うちの子はどうしてああいう、こわがりやなんでしょうね。

かまきりが、かきねのところにいたといって翌日からそこを通れないんですよ。

まったく困ってしまいますわ。」

このようなのは、たいてい女の子の場合である。

以上のような事実は、どのこどもにも多かれすくなかれみられることであるが、長い人生に対して生命のあるものに対する正しい接し方を経験しながら生長しているとはいえないのである。

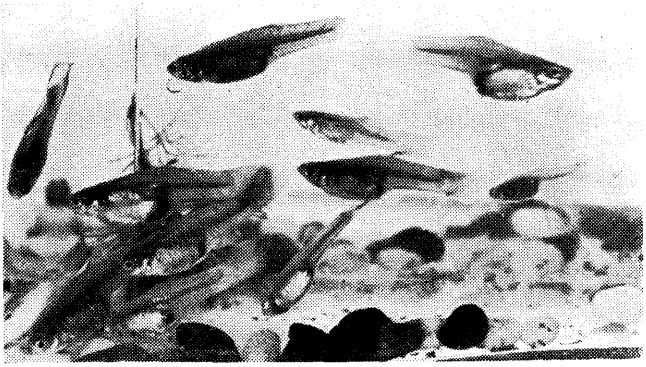
必要以上に神経質に生きものに接し、またそのような心の窓から生物を眺めて暮らすことになり、正常な生物の観方、考え方を育てる上に大きな欠陥となる芽がこの辺にひそんでいるように思われるのである。

幼児が成人後、正しい生物の観方や扱い方をするようになるためには、その生長していく途中において、幼児のときには、幼児に適するように、また小学生の時代には、児童のわかるように具体的な指導が加えられていくことが望ましいわけである。

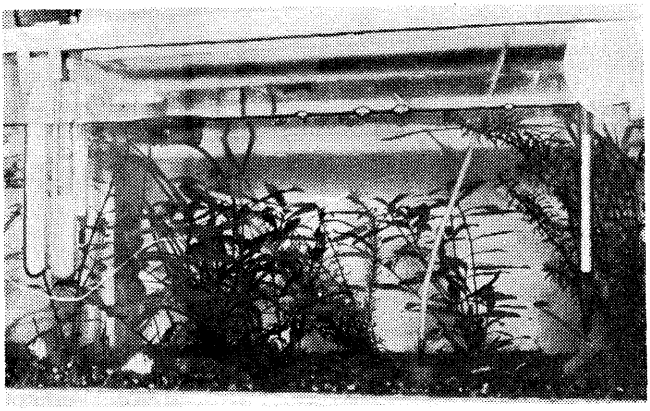
生物を見ればすぐいじめたり、ころしたりする男の子も、また、生物をみればそばへもよりつかない女の子もこのままでは決して正常な生長は望まれるものではない。

そこで、このような方面について保育するものの立場から、また保育をうける保護者の立場から、それぞれ解決していかなくてはならないと思われることについて考えてみたいと思う。

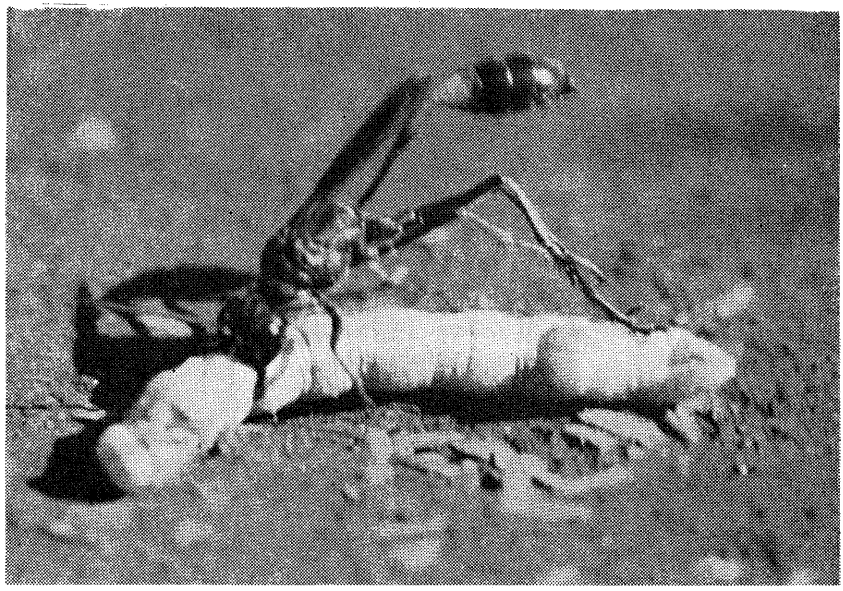
幼児の幼稚園で生活する時間と、家庭で生活する時間の比をみると、家庭で生活する時間の方がはるかに多いのであるから、この問題を解決していくための努力はむしろ保護者の側に強く望まれる問題であるように思われるのである。しかし、それが保護者の側にあるとしても、保育の直接指導者である幼稚園の先生は手をこまねいてこの問題をみていればいいということではな



“熱帯魚グッピーは水温 25°C内外の水をこのみ，水温が 15°Cよりさがれば，死んでしまうので水温の調節がむずかしい”



エンゼル，フィッシュを飼う



“ジガバチが産卵のためすでに堀ってある穴へ，シャクトリムシをますいさせてはこぶところです”

い。

現実の家庭生活では、幼稚園の先生が、この方面にも幼児の心の動きに観察の手をのばして、保護者に問題を提起し、更にできれば具体的な指導のしかたを一人々々の保護者にさしのべられるよう準備することが必要である。

保護者はとかく自分のこどもを客観的に、しかも正しく観ることのできないことが多いものである。そこで、客観的な材料を指導する先生から出して相談を持ちかけていくことが実行しやすく、また、正しい処理のしかたではないかと思うのである。

ある女の子が、イヌをみるとたいへんこわがることを幼稚園の先生が発見したとする。

このような時に、ただ幼児に、こわがってはいけません、とか、こわくはないんですよ、と言ってみたところで、それがイヌをこわがる心をなおす指導にはなっていないと思う。

指導する先生はイヌのより広い理解と、幼児に比していろいろと豊富な経験を持っているので、そのような内容を基礎にして、「こわくはないんですよ」という指導が正しいものであると確信して言えるわけである。

しかし、指導をうける幼児は、このことばをどのような心構えでうけとるであろうか。

これは、いろいろな形でうけとられるであろう。

ある幼児は『先生がそばにいるから大丈夫だ』と感じるかもしれないし、また、保護者が言った場合には『おかあさんがそばにいるから大丈夫だ』と考えるかもしれない。

また、ある幼児は『石をなげたり、棒でたたいたりしなければ大丈夫だ』と感じるかもしれないし、他の幼児は『そばへ近よらなければ大丈夫だ』と思うかもしれない。

感じ方、考え方、うけとり方などは千差万別である。

このように、先生のことばによる指導だ

けでは正しい生物に対する観方、考え方を育てることはむずかしいと思われる。

そこで、もっと指導のひろがりを広くとって、家庭との連絡によって解決をはかっていくことはどんなことであるか、また、学校で指導することはどんなことであるかなどを具体的に考えて指導をすすめるのがよいと思われる。

そして、保護者に望むことはなるべく具体的に話していくようにするべきである。

さて、このように考えてくると、先生と保護者が一つの観点について、ともにちがった立場から考えて解決していくべき性質のものであることに気がつくのである。

そこで、このように協力して問題を解決していくときの共通の目標は「生命のあるものについて、生命の力をみとめて、かわいがっていく心」を順調に生長させていくことである。

即ち、生きものに対して不当にいじめたり殺したりすることや、おそれたり、こわがったりすることなく、正しい観方、扱い方ができて人間生活に調和させていくようにしていくことである。

このためには、どうしても、なるべく多く実物にふれ、正しく豊富に観察させ、また、それを材料にして正しく考えさせて、正しい観方、扱い方を幼児は幼児なりに形づくっていく以外にはないと思うのである。

ただ、動物園につれていったから動物を正くかわいがっていく心が生長するとか、動物愛護デーをつくって、その日の行事を上手にくりひろげたから動物愛護の精神が培われたと考えるのは、たいへんあまい考え方であるといわなければならないと思うのである。

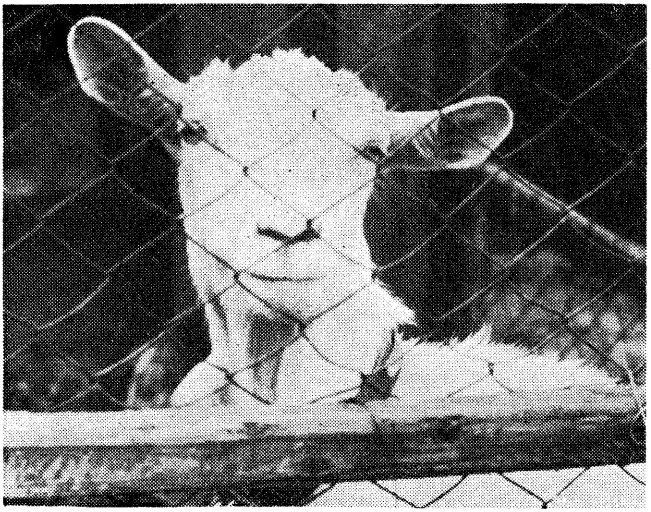
そこでたとえば、かまきりがかきねにいてこわくて通れないと訴える幼児の場合には、これがかき根のそばを通っても別に危害を加えないという事実をいろいろな観察や事実で幼児に経験させ、先入観念の是正をはかると共に、新らしい正しい感覚をつくりあげていくようにすることが必要になってくるわけである。

特に保護者の側への要望として、とかく、幼児の時代から上級学校への進学を考えるのに急なあまり、生きものに対する観方や考え方をゆがめてしまっている場合の多い事実で、これは幼児の教育に当るものとして常に考慮にいれておくことが必要であると思う。

二、生きものを正しくみたり、扱ったりする心

それでは、生きものを正しく観たり、扱ったりする心はどうしたら順調に生長させることができるだろうか。

“ヤギを飼う”



1. 先生自身が生きもの生命の力を正しく観たり扱ったりするよう努力をし、先生の言動が自然に幼児に影響していくようにすること。

四月頃によく見受けられるものについて考えてみよう。

花は万物蘇生の季節で百花きそって咲きそろい幼い心にも美しいと感じることであろうと思われる。ところが、これを無暗につみとったりするのは大人である。このような機会に、ただ、花つみをしましょうといって、みだりに花つみをくりかえすことは、生命の力をみとめてかわいがる結果になっていることだろうか。

このような雰囲気に育っていく幼児は、きれいな花はつみくさするためにあるように誤認しないとも限らない。心すべきことである。

このような機会にこそ、生命の力を幼児に強く印象づけていくよい機会でもある。

2. 機会をのがさず、家庭と協力不自然な感じ方、考え方をとり除いていくようにつとめること。

たとえば、かまきりのいるかきねのそばを通れない幼児のような場合には、どうすればよいだろうか。

このように特殊な場所に属するものは先生が保護者によく指導のしかたを話して、家庭でこれを解決していくように導くのが適当である。

このようなものについて、正しい感じ方に是正するためには、まず、よく観察させていくようにし、またいろいろ方法を変えて、幼児が、かまきりに対して持っている不当な感覚を消滅させてやるように導けばよいことを具体的に保護者に話して、家庭で行えるように示唆してやることが必要である。

こどもの生活を支えて強力にはたらいていくものは、生活経験を通して到達し得た生活態度である。

このような意味から、先生としては、ただ、幼児のこのような心を是正するにとどまらないで、すすんで正しい生物に対する観方、考え方を生長させて、やがて、根をかりおろした平和精神の体得者として育てしっていくことが望ましいことであると思う。

3. なるべく機会をつくって生物の生活（飼育のもの、野生のものを含めて）を正しく観察したり、考えたりすることができるようにすること、

自然界は複雑な調和の世界であるから、幼児に複雑な自然界のことを理解させることは無理なことであるが、できるだけ自然の姿に接するようにつとめ、それらの観察を機会にして一つ一つ問題を解決していくことが必要で、幼稚園の先生としてできる方面のしごとであると思う。

春の自然に、カエルのような生物が冬眠からさめて姿をあらわし、ハチやハナアブのような虫がみられ、また、ちょうが花に集まる。

このような事実を事実としてできるだけ直接に接する機会を多くすることが問題を解決する糸口になるものと思うのである。

そして、このような観察にあたってチョウをつかまえたがったり、花を折りたがったりする幼児があった場合には、みんなでよく考えて正しい考え方、扱い方にみちびくようにしていくことが必要である。

（お茶の水女子大学付属小学校）

☆　☆　☆

★　★

☆　☆　☆